

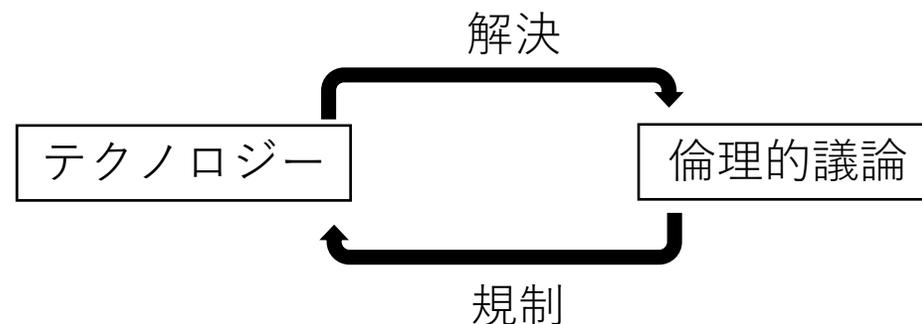
「肉食」は種差別的か
— “培養肉”を食べることが意味するもの—

高江 可奈子

kanako.takae@gmail.com

問題関心

- 今までの議論
 - 「テクノロジー」と「倫理的議論」は通常、互いに独立したものと考えられている
 - その上で、次に示す2通りのタイプの議論が展開されてきた



- 問題関心
 - テクノロジーと倫理的議論は互いに影響し合うものであるという見方に立ち、
 - テクノロジーによって倫理的議論やその前提部分がどのように変容するのかを見たい
 - 倫理的問題を解決する手段としてテクノロジーを捉えるのではなく、かといってテクノロジーを否定するのでもなく、
 - テクノロジーによる倫理的議論の変容を捉えたい
- 本発表では
 - 「培養肉」が既存の倫理的議論にどのような変化をもたらし、そこからこういった問いが新たに生み出されうるかを見ていく

1. 動物倫理学 の議論

- P.シンガーをはじめとする動物倫理学の議論は、現代社会の人間中心主義的側面を問題視してきた (e.g., 動物解放論, 動物権利論)
 - 「人間中心主義」とは一言でいうと、人間を特別視する見方である = 「人間の道徳的特権性」
- もちろん人間中心的な現代社会でも動物愛護や動物福祉の考えは存在する
- しかし、劣悪な飼育環境を動物に強いる工場畜産が廃止される気配はないし、全世界で毎日2億もの家畜動物たちが屠殺される現状は動物愛護の精神からは程遠いように思われる
- 社会が人間中心的である限り、この現状を変えることはできないのではないか
- このような背景のもと、人間中心主義からの脱却を論じる動物倫理学の議論が出てきた
 - シンガーの議論 (『実践の倫理』第2版) を中心に見ていく

1.1 種差別 (1)

- 現状を容認する社会の根底には、動物の利益を道徳的に重要なものと見做さない動物への差別があるとシンガーは指摘する

1. 問題提起

- 食肉用に生産される家畜動物たちは「去勢、母親と子供との隔離、群れの解体、焼き印押し、輸送、そして最後には屠殺」(p.78) という運命をたどる
- これらの過程で被る身体的・精神的痛みは人間と動物の間でそこまで変わらないように思われる
- 人間が毎日気軽に肉を食べたいという欲求のために、動物たちにこのような痛みを強いている
- 人間の利益に対して動物の利益を軽んじすぎているだろうか？

2. 平等原理

- まず、シンガーが「差別」をどのように説明しているかを確認する
 - 差別とは、特定の集団に属しているかどうかに応じて利益に対する配慮の比重を変える態度や判断、行為を指す
 - 例えば白人至上主義者は、有色人種の感じる苦痛が白人の苦痛と同程度に重要であるとは考えない
- シンガーの掲げる道徳的平等
 - 利益に対する配慮の度合いは属性によって変動してはならない
 - いかなる利益もその程度に応じて平等に配慮されなければならない

1.2 種差別 (2)

3. 種を越境する平等
 - 「人間」や「動物」も性別や人種同様、属性である
 - したがって、平等原理に基づくと、「人間」の利益と「動物」の利益も単なる「利益」として平等に扱わなければならない
 - 個々の人間に見出される相違や人種、性別だけでなく、種の境界も超えて、利益は平等に配慮されなければならないと言える
 4. 種差別
 - 「人間の利益」と「動物の利益」に対する配慮の度合いを人間であるかどうかによって変えることは「差別」にあたる
 - この立場は、「自分たちの種に属する利益の方を他の種に属する者の利益よりも重視」(p.71)していることから「種差別」と呼ばれる
- 肉食が社会で容認されている背景には、動物の利益よりも人間の利益の比重を大きく捉える見方 (i.e. 人間中心主義、人間の道徳的特権性) がある

1.3 肉食行為の是非

- 以上の議論をまとめると、次のように言える
- すなわち、肉食行為は、肉を食べたいという人間の欲求を満たすために動物が犠牲になるという点に問題がある
 - 人間の利益のために動物の利益が不当に犠牲になっている
- このようにして、肉食を容認する現代社会と（シンガー率いる）動物倫理学は対立することになる

2. 培養肉の出現

- 培養肉の出現は重要な道徳的意味を持つように思われる
- というのも、培養肉によって「肉を食べる行為」と「動物を犠牲にする一連の行為」を切断することが可能になるからである
- これにより、動物の苦痛や死を伴うことなく、肉を食べたいという人間の欲求を満たすことができる
- 現代社会と動物倫理学の対立は培養肉を通して解消されるのではないかと
 - 動物の利益を損なうことなく肉食行為が成立するので、種差別の問題は解消される
- 培養肉は、両者が融和するユートピア的地点と言えるのではないかと

3. 肉食の問題

- テクノロジーは、私たちが直面する倫理的問題を解決する有効な手段と見なされることが多い
- 培養肉の研究開発も、このようなテクノロジー的解決への期待を背負っていると言える
- しかし、培養肉へと移行することで、動物倫理学が提起してきた肉食の問題は本当に解決されるのだろうか
- ここで明確にしておきたいのは、この問いがテクノロジーに対する懐疑や否定を意図したものではないという点である
- 私が見たいのはテクノロジーによる倫理的解決ではなく、倫理的議論の変容である
- テクノロジーから新たな倫理的議論が生じる可能性を示すことで、テクノロジーと倫理的議論の積極的な関係を描き出したい

3.1 肉食主義

- 肉食行為の問題を「肉食主義」という観点から改めて考えてみたい
- M. Joyによると、肉食主義とは「動物の肉を食べることは至って正常であり、自然かつ必要な行為である」という信念体系を指す(p.96)
- すなわち、「動物＝人間に食べられる対象」という認識的および価値的見方
- 肉食主義の観点に立つと、肉食行為の問題は屠殺を含めた動物への暴力だけでは論じ尽くせない可能性が出てくる
- 「動物＝人間に食べられる対象」と認識し、それを普通のことと捉える価値的見方自体が問題であると考えることができるからである

3.2 肉食主義と培養肉 (1)

- 培養肉の文脈においても、動物は人間に食べられる対象として認識され続けることになる
- それはつまり、肉食主義が維持・継続されることを意味する
- しかし、そもそも肉食主義はなぜ問題となるのだろうか
- まず考えられるのは、肉食主義のもとでは、動物への暴力を「問題」と捉えることは難しいという点である
- その結果、問題が問題として認識されることなく、動物への暴力が続くことになる
- だが培養肉では、動物への暴力を抜きに動物の肉を食べることが可能となる

3.3 肉食主義と 培養肉 (2)

- では、培養肉の文脈においても肉食主義は問題となるのだろうか
- 擬似肉（大豆ミート）についてのGary Francioneのコメントが参考になる
 - 擬似肉自体は道徳的に問題ないものの、動物を食料とする見方や肉の代用物がないと“リアルフード”ではないという考え方は変えていく必要がある
 - （“I am trying to get people away from the idea that animals are ‘food’ and that we need meat (or cheese) substitutes or else we are deprived of ‘real’ food.” (Milburn2016, p.252)
- 培養肉もまた、動物を食料とみなし、私たちの食は肉食の形態を取るものだとする考えに裏打ちされている
- なぜ私たちは動物の肉にそこまでこだわる必要があるのか。肉食主義は「リアルな動物の肉を食べたい」という人間の欲望と常に絡み合っていると言える

3.4 肉食への欲望

- 培養肉を通して、動物への暴力によって覆い尽くされて見えていなかった肉食行為の根底にある「肉食への欲望」が前面化する
- 培養肉における肉食主義の問題を考えるには、「リアルな動物の肉を食べたい」という欲望に焦点を当てる必要がある
- 培養肉の出現によって、私たちは肉食への欲望と向き合わざるをえなくなる
- この欲望は、道徳的に間違った欲望（抱くべきではない欲望）なのだろうか

4. 肉食と種差別

- 「肉食への欲望は道徳的に適切か」という問いに対して私は、その欲望が種差別的である限りにおいて問題だと主張したい
- まず、私たちは、肉食への欲望を人間に対して向けることは不適切だと考える
- 肉食への欲望はあくまでも動物に対して向けられているのである
- それはつまり、「人間」は食べてはいけない対象であり、「動物」は食べてもよい対象と捉えていることを意味する
- このような「人間」と「動物」の道徳的二分化は種差別の温床となるため、問題である
 - 肉食主義から導出される道徳的二分化は、人間の利益と動物の利益が別物であるという認識を強化し、種差別を正当化することにつながる
- 二分化による差別の正当化は性差別や人種差別にも見られる
 - 女性は子供を産んで家庭を支える生き物だ
 - 男性は浮気をする生き物だ
 - 女性に対する社会的抑圧が正当化

4.1 種差別的でない肉食の可能性 (1)

- このように考えると、肉食行為は、たとえ動物への物理的暴力が介在しなくとも種差別的である点で容認されるべきではないと言える
- それでは、肉食への欲望のもとで開発されている培養肉を私たちは拒否すべきなのだろうか
- この問いに対して私は、培養肉を通して種差別的でない肉食の可能性を切り開くことができると主張したい

4.2 培養肉と カニバリズム

- 具体的には、人間の培養肉を食べるという発想によって種差別的でない肉食の可能性が生じるという主張を展開したい
- 今まで見てきたように、培養肉への移行は肉食主義からの脱却を必ずしも意味しない（むしろ強化しうる）
- しかしその一方で、培養肉によって肉食行為のあり方が根本的に変わることも否定できない
 - 食べる行為と殺す行為の切断
 - 動物は殺される対象から（肉片を作るための）細胞の提供者（ドナー）へと変容する
 - 従来とは異なる新たな関係が創出されることになると言える
- この新たな肉食行為の形はカニバリズムの可能性を提起しうる
- 殺さずに肉を食べることができれば、人間の肉を食べることも認められるのではないだろうか

4.3 テクノロジーと流動化する倫理的議論

- 動物の培養肉から人間の培養肉へと結びつける発想に違和感を覚える人がいるかもしれない
- この違和感の根底には、「人間は動物を食べる対象とみなすが、人間を食べる対象とはみなさない」という根強い見方があるように思われる
- しかし、この違いは「人間」と「動物」の根源的差異なのだろうか
- 「人間＝食べるべき対象ではない」と考える倫理的根拠はどこにあるのだろうか
- テクノロジーを媒介にして私たちの根源性はさまざまな形に変化していくものなのである

6. 本発表のまとめ

- 肉食の是非をめぐる従来の議論は動物への暴力に主軸が置かれてきた
- この議論では培養肉の問題は抽出できないことを確認した上で、
- 肉食主義の観点から、暴力が介在しなくとも肉食行為が問題となることを論じた
- このことから、培養肉の研究開発を手放して推進していくべきものではないことを示した
- だが、それと同時に培養肉は、新たな肉食行為の形を提起しうるものであり、そこから今までの動物倫理学の議論が突破しきれずにいた「食べる側の人間」と「食べられる側の動物」という道徳的二分化を瓦解することが可能になるかもしれない
 - 「人間の培養肉を食べる」というカニバリズム的発想を通して、「種差別的ではない肉食」の認識と欲望が新たに創出される可能性
- ここに、テクノロジーと倫理的議論の積極的な関係（培養肉を通して種差別の議論が前進する）を見出すことができる

参考文献

- M. Joy (2010) *Why We Love Dogs, Eat Pigs, and Wear Cows— An Introduction to Carnism*
- J. Millburn (2016) “Chewing Over In Vitro Meat: Animal Ethics, Cannibalism and Social Progress”
- C. Diamond (1976) “Eating Meat and Eating People”
- 宮崎裕助 (2020) 『ジャック・デリダー— 死後の生を与える 』

補足スライド (1)

- 道徳的二分化を種差別と断罪するのは早急すぎると反論されるかもしれない
- 例えばCora Diamondは、道徳的二分化の棄却を目指す動物倫理学を次のように批判する
 - 動物倫理学は人間と動物の両方に同じ道徳原理（平等の原理）を適用する
 - しかし、そもそも人間同士の関係と人間-動物の関係は異なっている
 - この差異を無視して平等の原理に訴える動物倫理学の議論はお門違いである
- 確かに、肉食への欲望を考えると、それが人間-動物に固有の关系到根ざしたものであるように思える
- そもそも私たちは人間を食べる対象と見なししていないのだから、人間同士の関係を持ち出して肉食の是非を論じるのは見当違いというわけだ

補足スライド (2)

- Diamondの見方からすると、道徳的二分化は人間や動物との道徳的関係を築く上での根源的な差異なのであり、種差別ではないことになる
- つまり、性差別や人種差別のような差別形態とは異なるというのである
- しかしこの見方は、道徳的二分化において措定される「人間」という概念に内在する暴力を見過ごしている
- J.デリダはこの暴力を「肉食供儀」と表現する
 - 「人間（という問い）は、たえず非人間の犠牲を要求している」（宮崎 2020, p.168）
 - 「どこまでも「人間/非人間」の二項対立のなかで問われているかぎり」、動物は「人間によって媒介され人間の対立物として人間から意味を付与されるがままになる「動物」、ついには人間が自己確認するためにいわば供物として捧げられる「動物」と成り果てる」（同上, p.170）

肉食への欲望は、「人間は単なる動物とは異なる、特別な存在なのだ」という願望の表れとして理解できる